

語り手

奥居 おくい

隆夫さん たかお



奥居仏壇宮殿工房 宮殿師

くうでんし

昭和二十一年七月十二日姫路市小姓町に生まれました。十数年間サラリーマンを務めた後に、宮殿師である兄の下に弟子入り。六年間の修業を積んで独立し、「奥居仏壇宮殿工房」を営んでいます。平成十二年には兵庫県技能顕功賞を受賞するなど、高い技術力で姫路の仏壇業界を支えています。

## 『感覚』という技術で、仏壇の屋根をつくる

### 宮殿師になるまで

僕は高校卒業して、十年ちょっとサラリーマンをして。んで、脱サラ。せやから二十八でこの道に入って。ものを作るとか、商売にしてもなんにしても、自分でやりたかったっていうのが一番かな。それから、小っちゃい時から工作みたいなのが好きやったさかいに。もう小学校、中学校、高校と、プラモデルやったら数知れんほど作った（笑）

ちよと六歳上の兄が親方で、その親方の下に弟子入りした。せえへんか言われて。おもしろそうやったし。兄は中学卒業してすぐ、その親方のところに住み込みで、昔でいう丁稚奉公みたいな形で修行して、独立したから。その修行したところ知ってるから、中学校ぐらいの時やったらよー行ってん。ここと一緒にいっばい木切れがあるのを、要らん木をもろてきて家でなんか作ったりして。仕事自体は知ってた。中学校ぐらいからどんな仕事やいうことは。

修行は六年間。六年間では早いんやけんどね。親方が兄やったから、普通やったら弟子入りしたら、「タバコ買って来い」やら雑用ばかりさせられるけど、それがなかったからね。行ってすぐに、こんな木持ってきて「これで削れ」とか、自分がしたやつ「これ組み立て」とかね。そんなをすぐにさせてもらえたから。案外仕事覚えるのは早いこと覚えられたわね。でも決してこうするんやで、ああするんやでとは教えてくれないね。職人仕事はみなそうや。見て覚ええやからね。

### 宮殿師の領域



宮殿師は今、姫路で二人しかいない。仏壇の宮殿、屋根をつくることになる、仕事の範囲が狭くなるでしょ。その仏壇自体も、生産してる地域と生産してない地域があるでしょ。だからやっぱり、ものすごい少ないんよ。しかし関西の方面やったら京都、大阪、姫路、彦根とか、西のほう行ったら広島。産地はあるんやけどそれも少ないから、そんな中で宮殿師、屋根屋というのがまた少ななるね。ほんで仏壇によって産地があるんよね。姫路仏壇とか、京仏壇、大阪仏壇、広島仏壇いうて。姫路仏壇の場合は一本最後までこしらえるのに九人の職人さんがいる。各専門分野でやっていくんやね。それで初めて、一つの仏壇が完成する。そんな中で僕は宮殿という一部を携わってる。

後ろにあるんは、浄土真宗西本願寺派の宮殿。それが看板みたいなものやね、私の。何の仕事ですか、はいこの仕事ですって。宮殿と書いて業界では「くうでん」っていう。ほんでこれが高欄（こうらん）、須弥壇（しゅみだん）、前にくる前卓（まえじょく）という机、大体これ一式がこの仏壇の中に入る。全部、宮殿師がする領域。一式で大体、実働十日ないし十二日ぐらいでできるかな。詰めてね。

## 職人の技術

仏壇屋さんから注文受けて寸法聞いて。せやから別注品ばかりやね。既製品やったら店に並んでるやつ、「これください」「ほな配達します」で済むんやけど、別注品やったらお客様の仏間の寸法測って、宗派を聞いて、この宗派やったらこの形の屋根ってなったら、それから始めていくん。ほんでその大きさもいろいろ、内間、合間、外間、それは決まった大ききなんやけども、別注品になったら、その基準よりちよっと大きいとか基準よりちよっと小っちゃいのんあるでしょ。まずは木地屋さんで木地ができれば、中の寸法を僕



らが図りに。で、その仏壇に入る、屋根を作るわけやね。

何にもないところからするから、とりあえず木取り。一番最初は、そこらに寝転がってる木を機械できれいに削って、寸法を出して、この部分やったら、この太さのもん、この幅でいるなあ思ったら、木を切らなあかんわな。それができたら型紙乗せて、書いて、これを墨入れていうんやけど。墨入れたら糸鋸で切って、これ（鉋）で削って、完成させて、その部品に取り付けていく。全部組み込みで。こないしてグラグラするでしょ。今度は漆塗るから、全部バラバラにできるわけ。塗る、塗りしろをとってある。せやから、ゆとりをとってある。塗りができるとバチツと締まる。これも一段一段、全部バラバラになる。でないところいう中のほう塗れへんでしょ。漆塗る人を塗師（ぬし）屋いうんやけども、塗師屋さんどこ持って行くときに塗師さんが下地つけるんよね。その職人さんによって、分厚く下地する職人さんもいたら、薄くする人、みんないろいろ手が違うから。あそこ行くんやったらこれぐらいのゆとりにしとことかね。変えんことには「組み立てられへんー」言うて怒られるからね（笑）

## 道具は自分で生み出すもの

もう道具が命やね。しょっちゅう使ってるもんは、結構ちびていくんやけどね。研ぎすぎたらこのくらの長さになってしまう。これがサラの時の。道具屋さんで買ってきいたらこの状態で売ってるんやね。これではものすごい使いにくい。せやから自分で使いやすいように柄を割ってしまっって作り直す。このほうがバランス的に使いやすい。刃も切れやんだら研ぎ、切れやんだら研ぎしてたらこれぐらいになる。こないなったら使いにくくなる。せやからこれは鉛筆削りや（笑）

中には見慣れんような道具もある。これ出丸鉋いうて。これと反対の、内丸鉋いうのも



ある。変わったこんな鉋もあるんよね。これはね、まっすぐの木じゃなしに、こんな（曲がった）木がある場合ね。それ用の。舟形鉋いうてね。船の底みたいな。これかて、普通の小さい平鉋で作るん。こんなもある。面取り鉋いうねんけどね。これは作里鉋いうてね。幅を自由に変えられるのが、これなんよ。場所によって、この鉋使い、あの鉋使い。他の人が見たらなんや汚い道具やな思うやろやけど、僕らからしたら大事な道具やねん。

こういう型紙を作るんよね。こういう型紙にずっと書いていくん。大きさによって、いろいろ、みなつこたあとの型やね。一回きりのんもあるし。こういう型がいっぱいいるわけ。まずはこの型作り。あるもんは使えるけど、またこれよりもうちょっと小っちゃいのとか、大きいのかなったら作らなあかんからね。この同じ勾梁（こうりょう）でもいっばい、今までの分があるわけや。こん中で合うのんないかなって探して。探してなけりゃ、サラでせんなんしね。いっばいこんな型がいる。仕事するには一番大事なやつやね。

## 材料は適材適所

うちで使てる木はベニ松と、ヒノキ、今のところそれぐらいかなあ。今は合板、ベニヤ板が大体主流になってきているから、ベニヤ板なんかもよう使いますね。場所によって。僕らも持っている木の幅が大体八寸いうて二十四cmぐらいの幅しかないから、もし五十cmの幅のものがあるんやったら、二枚くっつけなあかんわね。木と木をくっつけるんを、接ぐ（はぐ）っていうんやけど、二枚接ぎにせなあかんから。それよりはベニヤ板やったら大きなんがあるでしょ。ほんだら、そのベニヤ板を使って養生してからしたほうが。木と木は性質が絶対違うから、膨れたり縮んだりするんやね。作ったときはばっちり合っても、こっちのほうが早いこと縮んだら段がつく。塗ったとこに段がついたら塗りが割れてしまう。せやから、絶対に無垢の一枚もんでないとあかんっていうところがあるわけ。それやったら



「そんな広い木がないから、ベニヤにさせてください」って。そんなんで材料を選ぶというか、考えるというかね。

## 仕事に対する姿勢

作業してるときは今からやってる次の工程のこと考えもってやってるからね。木を貼り合わせたりくっつけたりするわね。その場合、今やったらポンド、昔やったらニカワ。ニカワで五時間ぐらい、ポンドで七、八時間、じっと置いとかなひつつかへんのですよ。置いといて乾くんじーっと待っとられへんやろ？ほな次の違う工程のことをせなあかんよね。これを先にひつつけといて、乾いとる間に今度こっちの仕事しよとか。これの仕事できるときに自分はこっちの仕事にかかれるんやとか。そんなん仕事の段取り言うんやけど。やっぱ段取りを考えもってやってるから、別に寂しいこともないし、話してたら仕事ならへんしねえ。ここに入ったらスイッチ入ってここ離れたらオフになる。

仕上がって持って行って、「ああようできたな」って言われたときがやっぱりね、よかつたなって思うわね。もっと上手になりたい、もっといいもんがしたい、そればかり思いもってやってるわなあ。こんなもんでいいわ、なんかは一切思ったことなかった。こうしたほうがいいんちゃうんかなあとか、親方からこういうふうなやり方教えてもうたけど、こっちのほうがいいのになあとかね。今は勝手に手が動いているというか。相手の仏壇屋さんも、もう任してくれてるっていう感じで。今までやったら細かい部分もなんぼか言うてきたこともあったけど、今はもうほとんどないねえ。僕の仕事を全て言ってくれてるから。

僕らののは、仏壇屋さんに対して納めるやつでしょ。ほんまいうと、使ってくれてる人のが聞きたいいうのもあるんやけど、なかなか接点がないんやね。仏壇屋さんへ渡してしも



た時点で僕の仕事は終わるから。後は仏壇屋さんが塗って、飾りつけて、組み立てて、お客さんのところへ持って行かれるからね。中には、買う人を施主さんっていうんやけど、施主さんを知る場合もあるんやね。ものすごい別注品ええのやったら、仏壇屋さんが僕ら職人を連れて行くんやね。ほんで「この人にしてもらうからこの部分は」とか言われて。そんな場合やったら施主さんの顔見えるでしょ。そういう場合はやってもやりがいがあるうか。ああ、あの人を買ってくれるんやとか、あの人がお祀りしてくれるんや、とかいうて、やっぱりそれがこう出てくるわね。施主さんの顔が見れるいうことはええことやけどね。めったにないけどね。

もう長いからね、仕事は難しいことはあんまりないんやけど。たいがい言われたことは「できるでー」言うて受けるほうやさかいね、「ようしません」いうのはよう言わん方やから。相手も、私やったらしてくるやろうでできるやろう思て言ってくれるから、「いやあそんなことできません」なんかよう言わんし。

## 業界の今後

やっぱり厳しいね。というのには、仏壇自体が売れない。なんで売れないんやろなあって考えたらいっぱいいろんな要素があるね。生活様式が変わってる。一番にね。ほんで、今、法事って家でせえへんよなって。お寺か、会館か、そういうとこやな。昔やったら、家でみな、お仏壇の前に親戚中がずらーって座って、お膳出して酒飲みもって、亡くなった人のことを偲んで話してやってた。その中には、「うわーお前とこの仏壇ええ仏壇やなあ。ほなわしも今度がんばるわ」って。そんな人がいない。仏壇見てせえへんでしょ、そういう行事を。やっぱりそんな人も影響してんの違うやろか。「仏壇ごっついの一千万の買ったで」ゆーても誰も見へんもんね。価値観がものすごい変わってきてる。

宗派も知らへんやろうし、仏教に対する信仰心も薄いやろうし、お正月いうたら神社行つてとかそんなことはするんやけど、儀式みたいなもんだけであって、心底お宮行くか言うたらそうでもないからね。お仏壇、仏教もそれやと思うんよ。僕らの小さい時やったら、おじいちゃんおばあちゃんも一緒にいたわな。今みたいに核家族じゃなかった。ほんなら、どこかお隣さんから、お饅頭いただいたとせんか。「それ食べるよか先に、お供えしてこい」というような、そういうことがあったわけやね。そういう信仰心が生まれてたけど、今もうあらへん。仏壇がないもんやからそれができへん。核家族なつてもて、そういうことを言う人がおれへん。今の若い人たちが信仰心がないのは僕らも責任があると思う。僕らの年代もね。そういうことを教えてこなんだから。せやからいろんな要素がかみ合つて、この業界がだんだんこうね、なつてゐるんやろなつて思うね。

## 職人仕事の難しさ

続けたいけども、仕事がなかったら続かへんしね。今までやったら、だいぶ先のもんまで聞いてやってたんけどそれがないから。仕事はやりたいけども、続かないんちゃうかなあ。仏壇自体が売れるような時代は来ないん違うかなーと思うねえ。きーへんとは断言できないけど、少なくとも私が生きてる間は来ないん違うかな。それはもうしゃないわね。仕事としては楽しい仕事やけどね、やりがいのある楽しい仕事。せやから言うて、ここで急になつたさかい言うて、すぐできるか言うても、またこの仕事はすぐできへんしね。昔から十年で目安言われて、僕はたまたまラッキーで六年で独立できたけど、独立したての時なんか誰も一人前に思ってくれなんだもん。その代わり、くそーっ思つてがんばったけどな、その時は。それだけ一番よう燃えてたわな、独立したところやし、よしやつたるいう感じやったし、若かつたし（笑）



手さえ動いたら続けていきたいね。いっぱい注文があって生活が成り立ったら、若い衆でも入れて、そんな時期もあったことはあったけどね。こんな仕事を知ってる人が一般的にいやらへんやろけど、こんな仕事したいんや言うて来るんやったらなんぼでも教えてあげるし、私が仕事できんようになったら、型にしても道具にしてもみんな譲ってあげるんやけどね。来てもなかなか生活できへんなあ、もうこの職人ではね。

聞き手

谷口 奈央 さん

兵庫県立大学環境人間学部の三回生。建築を専攻しています。出身は淡路島です。聞き書きによって、語り手さんの人柄や人生が浮かび上がってくるように感じました。文字だけでその人の空気を表現できることが、聞き書きの素晴らしさだと知りました。今回学んだお話の聞き方・言葉の引き出し方を、今後の取材や日々の会話で心がけたいです。